
恋とはこんなものでしょう

日野 花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋とはこんなものでしょう

【Nコード】

N8633M

【作者名】

日野 花

【あらすじ】

女子高生の菜々は恋愛経験が皆無で、早々に処女を喪失したいと思っていた。しかし学校は女子高で、喫茶店でのバイト仲間は30歳過ぎてフリーターの清人だけ。そんなとき清人の元カノでキャリアウーマンの房子が店の常連になる。清人は房子にアパートの鍵を返すように再三要求していたが、房子は何かとはぐらかして返すのを渋っていた。（全4話予定）

一 いつ飛べるのかしら、この蝶々

カフェ・フィガロにはいつもモーツァルトが流れていました。店主は毎週金曜日の夕方になると、スポーツ新聞の出馬表を眺めながら、

「モーツァルトが脳を刺激して、予想の助けになるなあ」

と、しみじみ口にするのが習慣でした。アルバイトの女子高生、菜々は聞かたびに、

「でも、全然当たってませんから、助けになつてるとは言えませんがね」

と口調を苛立てていました。もうひとりのアルバイトでフリーターの清人は、毎週毎週同じ台詞を同じ新鮮味をもつて言える二人に感心していました。

実際のところ、菜々はいつも焦って苛立っていました。自分の生活は家と女子校である学校と、冴えないおっさん二人しかいないこの喫茶店だけ。これではいつまでたっても恋なんかできません。高校卒業までになんとか処女を喪失したいと切望しているのですが、三年生になつたら受験勉強に専念したいので、実質的にはもう数ヶ月しか猶予はありません。美人とはいわないけれど、性的価値が高いとされる女子高生なりにかわいいつもりなのに、生まれてこの方どうして恋人がいらないのでしょうか。もしかしたら、このまま一生結婚どころか恋人もできず、処女のまま死んでしまうのかもしれない。そうでなくても、処女喪失年齢が二十歳過ぎつていうのもありえない恥ずかしさって気がします。もしそうなつたら、と考えるとこの呪われた人生が恨めしくすら思えてきました。

「マスターはもうおじいさんみたいだから違うけど、そのフリーターのひとは？」

学校の友達は、手近なところで手っ取り早く、というアドバイスをくれました。

「大人だし、いいじゃん。ヤバいひとじゃなかったら、最初の相手には。失敗なさそうだし」

「デブとかハゲとかブサイクとか、そーゆーんじゃないけどさあ、34歳でロン毛のフリーターだよ？ ヤバいっしょ。正直キモいよ」
そんな清人でしたが、菜々の中で一気に株が上がる出来事が起こりました。キャリアウーマンの女友達が常連として店に顔を出すようになったのです。昼夜を問わず「房子さん」はふらりと現れると、コーヒーを頼み、コーチの大きなバッグからパソコンを取り出して仕事を始めました。ビジネス書を扱っている出版社の編集者だそうで、「できない上司を操縦するマル秘テク」「あなたは本当は2時間早く退社することができる」というような本を作っているそうでした。房子がファッション誌とかそのテの雑誌の編集者でないのは残念でしたが、細身の身体にドルガバのスーツをまとい、テーブルに置かれた光りっぱなしの携帯を無視しながらパソコンを叩く姿は、菜々の目に輝いて映りました。房子は30歳過ぎのフリーターの女友達としては、「ありえないほど美人」でした。こんな女友達がいる清人は、もう「キモく」ありませんでした。菜々にはメールのやりとりをする男友達すらいませんでした。

房子は自分が店に来ると、若い女が表情を輝かせながら、いそいそとオーダーを取りにくることに気づいていました。もちろん悪い気はしなかったもので、にっこり微笑んで、「こんにちは」と言うようになりました。すると菜々は少女らしく、「いらっしやいませ」とはにかみました。房子はかわいいな、と思いました。

そして菜々の中で、清人の株がさらに上がる出来事が起こりました。ある日いつものようにカウンターで房子がコーヒーを飲みながらパソコンで企画書を打っていると、カウンターの内側から清人が、「おい、鍵、いつ返すんだよ」

と言いました。このときは菜々もカウンター内にいたので、はっきり聞こえました。

「返すって言うてるじゃん。別に今までだって黙って部屋に入っ

ことなんてないんだから、急いで返す必要ないじゃん」

「そういうもんじゃないだろ。俺たちもう別れたんだから、お前が俺のアパートの鍵もってるの、おかしいだろ。返す返すって、全然返さないじゃねえかよ」

房子の顔に不愉快の三文字が浮かび上がりました。菜々は房子の生々しい表情に触れて、軽く怯えました。

「どうしてこんな若い女の子がいる前でそんな話するのよ。聞かされるほうだって迷惑だよ」

「二人のときに言っても、返さないからだろ。証人が必要なんだよ。菜々ちゃんだって、この程度の話に困るような年齢じゃねえよ。なあ」

菜々は返事に困って房子を見ました。房子は凍りついた顔でパソコン画面に視線を戻して言いました。

「未成年の前でそんな話、成人男性としての良識を疑うわ」

菜々はその日一日ドキドキしていました。テレビドラマや映画ではなく、生の「大人の恋愛」に初めて接した気がしました。あの二人は恋人同士だったのです。思わずマスターにこっそりと、

「知ってました？」

と言ってみたところ、へえ、と大した関心も示されず「2010年種牡馬データファイル」という本に視線を戻されてしまいました。菜々はちよつとはしゃぎすぎたかと、反省しました。

それにしても房子みたいな女性が、あんなヨレたフリーターとつきあっていたというのはよくわからないけれど、恋人関係を解消しても交友が残るといふのはなんて素敵なんでしょう。菜々は自分もそういう恋愛をたくさんしたいな、と思いました。素敵な元彼に素敵なバーで、素敵な現在の彼氏について話すのは素敵だと思いました。30歳になったとき、素敵な元彼がたくさんいたら、とても素敵だと思いました。

（第二話に続きます）

二 飛べるかどうか、うかがってますよ、この蝶々

次の日菜々が出勤すると、勝手口のところで清人がタバコを吸っていました。清人は、おう、いつものように声をかけ、ちわ、とこういったものの答えを待っていました。しかし菜々はあつ、と驚いたように目を見開き、声も立てずに店に小走りに入っていました。清人は少し考えて、もしかして昨日の鍵の話は多感で潔癖な17歳にはやはりマズかったのかもしれないと思いました。ただでさえ三十過ぎのフリーターと軽んじられている様子なのに、この上「そんな男が色恋沙汰を店に持ち込むなんて」と、ノミかシラミでも見るような視線を浴び続けることになったら、やはり面倒くさいな、と思いました。

房子は著者やデザイナーのところに行った帰りに途中下車して、フィガロに行くのを習慣にしていました。つきあっているときは清人のアパートでも外でも会えるので、ろくに話すこともできないのにバイト先に行く必要はありませんでした。しかし別れを告げられた今では、フィガロが清人が自分を拒否しないと確認できる唯一の場所でした。

鍵を返せと菜々の目の前で言われた日の夜、房子は、「私が店に行くの、嫌なの？」とメールしました。すぐに来た返信には「そんなことないよ」とだけありました。それでも房子は一週間フィガロから足が遠のいていました。何を期待していたわけではないけれど、やはりこの一週間、清人からはなんの音沙汰もありませんでした。でもだからといってこのまま距離を置いていたら、さらにフィガロにも足を運びにくくなってしまいうでしょう。房子は意を決して一週間ぶりに途中下車しました。

すると改札で、制服姿の菜々を見かけました。房子が猫背で俯き加減の菜々に声をかけると、色あせた日常に打ち沈む表情は一転して花開いたように輝きました。房子は自分に会っただけで、こんな

に華やいだ表情を見せてくれるひとは他にいないと思いました。菜々はバイトが非番のようで、帰宅途中でした。房子は雑誌の星占いに「ちよつとした偶然が生活に大きな変化をもたらすかも」とあったのを思い出し、菜々を夕飯に誘ってみました。

二人は駅前のパスタ屋に入りました。菜々は房子と向かい合わせに座ると、

「やだ、すごい緊張する、ドキドキする」

とモジモジしながら言いました。房子は、なんで緊張するのよ、と笑いながら、「大人の女」の像を裏切らないよう、牽制されているようだと思いました。

パスタが来ていざ食べ始めると、菜々は堰を切ったように質問攻めを始めました。清人とはどれくらいつきあっていたのか、どこで知り合ったのか、どこがいいのか、彼はこれからの人生どうするつもりなのか等々。核心をつく質問の屈託ない速射砲。これで相手が大人なら、なんとでもはぐらかせるところでしたが、真っ直ぐ濁りのない視線が注がれると、それも叶いませんでした。房子が、飲み会で知り合った、五年つきあった、などと応えるたびに、菜々は深い英知を得たかのようにしみじみと頷きました。

「別れても友達っていいですよねえ」

「そうね、つきあい長いから、終わりのほうは友達みたいなもんだっし」

「房子さんのことだから、今はもう新しい彼氏とかいるんでしょうねえ」

「まあ、彼氏ってほどじゃないけど、何人かはね。私も次につきあうのは結婚相手と思ってるから、今は簡単にひとりには決められないわね」

高校生相手に、なんでこんな安っぽい虚栄心を発揮しているんだろと、房子は情けなくなってきました。

「で、結局清人さんのこと、どう思います？」

房子は水の入ったコップをつかむと一気に飲み干しました。驚い

た菜々ははつと我に返ったようで、

「すみません、いろいろ」

「うっん、そういうわけじゃないんだけど」

「なんていうか、房子さんには、私、言っちゃおうかな」

房子は清人が自分のいないところで、菜々に自分のことを今どう思っているかなどと話しているのではと怖れました。

「私、恋愛経験もあんまりないし、なんてゆーか、いろんな駆け引きとかテクニクとか、あるじゃないですか。そういうのもわかるようで、でもやっぱりよくわからないし、房子さんみたいな女の人と長くつきあった男の人からしたら、私なんて女とも思えないほどつまらない存在でも当たり前だなんて思ってた」

菜々が何を言ってるのか房子はよくわかりませんでした、云わんとしているところを汲み取るうとにじり寄ると、予想外のものが手に触れそうな気がしました。

「どうって、まあ、あんなひとだけど、悪い人じゃないわよ」

房子は質問の核心がわからないふりをする容疑者の心情でした。

「そうですね、房子さんが好きになって五年もつきあったひとなんだから」

菜々はうんうん、と細かく何度も頷きました。

別れ際、菜々は房子の右手を取ると両手で握り締めて言いました。

「今日は誘ってもらえてとても嬉しかったです。お店にまた来てくださいね」

結局その日房子はフィガロには寄らず、そのまま駅に戻って電車に乗りました。電車にゆられながら、憂鬱になってきました。菜々にとつて、世界には自分の知っていることと知らないことがあるだけで、すべてのものが輪郭鮮やかに存在していると信じきっているように見えました。それにひきかえ、三十歳を過ぎた自分の意志は手応えのない薄闇に沈んでいました。いったい自分は結局のところどうしたいのか、モヤモヤと自分のため息の上を歩いているようでした。

房子は家に帰って、清人に電話をしてみました。無視されるかと怯えましたが、清人はすぐに出ました。房子は菜々と夕飯を食べた話をしました。

「それでね、びっくりなことに、あの子、あなたに惚れてるみたいよ」

房子は自分の声が少し震えてるような気がしました。清人はまさか、と言いながら笑い出しました。「女子高生に惚れられて、嬉しい？」

「俺は女子高生モノにはあんまり興味ないからね。本線は若妻モノよ」

思わず噴出すと、房子の心の奥はじんわりと温まっていきました。この五年間、仕事でつらいときに、何度も清人が与えてくれた感覚でした。

三 とりあえず飛んでみようか、この蝶々

やっぱり清人は自分にとって特別なひとだ。こんな人間が与えられている私の人生は祝福されている、と房子は久しぶりにフィガロに足を運ぶと、清人は顔を見るなり開口一番言いました。

「おい、今日こそ鍵もってきただろうな？」

正直なところ、鍵はいつも持っていて、いつでも返せる状態にありましたが、房子は清人を無視してテーブル席につきました。バッグから雑誌を出し、いつもみている星占いのページを開けました。房子は蟹座でした。するとコーヒーを持って来た清人が、

「あんたも好きだね」とつぶやきました。

その後二人は言葉を交わすことなく、清人は上がり時間になりました。蟹座の欄には、「気にかかっていることを行動に移すなら、今日がチャンス」とありました。

清人がアパートでテレビをみると、房子から「今から鍵を返しに行く」というメールが入りました。嫌な予感がしたので、「今度店に来たときでいいし、俺がいなかったらマスターに預けておいて」と返信しました。するとすぐその返信が来て、「一緒に鍋でも食べようと思つて、材料も買つてきちゃった。菜々ちゃんも一緒。もう着く」。

菜々は一人暮らしの男性の部屋に入るのは初めてで、とても緊張しました。房子みたいな大人と一緒によかったと、心の底から思いました。

やがて二人は清人のアパートのインターホンを押してきました。

清人は菜々がいるので無碍に迫り出すこともできず、不機嫌な顔で二人を部屋に入れました。房子がどのくらい食べるのかなどと問かけると、清人はもう食べたし、あまり腹減つてない、と不愉快そうに答えました。房子は気詰まりになりましたが、菜々は自分の父親が母親に口をきくときと同じ、気の置けない男女の仲ならではの

無愛想だと思つて気にもかけませんでした。鍋が出来上がるも、誰も言葉を発せず。部屋には鍋が煮える音ばかりが響きましたが、菜々は粗相のないように行儀よく食べるのに神経を張っていて、二人がどうこうより、二人に自分がどう映るかのほうが気がかりで仕方ありませんでした。

「そこまで邪険な態度とらなくてもいいじゃない。菜々ちゃんもいるのに」

やがて房子が語気を荒立て、菜々は雲行きの怪しさによりやく気づきました。

「別に邪険な態度なんてとってないよ」

「取ってるじゃない」

「じゃあ、突然ひとの家に押しかけてきて鍋つていうのは、どうなんだよ。鍵を置いてさっさと帰れよ」

「鍵、鍵、鍵つて、うるさいわねっ！」

房子はさつと立ち上がると、慄く菜々を尻目に、コーチのバックを探つて鍵を取り出し、煮える鍋の中に投げ込みました。音を立てて鍵が投入され、鍋のスープが菜々と清人の顔と服に跳ね上がったかと思うと、ドアが大きな音を立てて開閉しました。一瞬にして菜々と清人は二人きりになってしまいました。二人はしばし呆然となりました。

「びつくりしたでしょ。なんかごめんね」

一息つくと、清人はいつもの静かな声で言いました。

「いいえ。でも、びつくりしましたけど。房子さんみたいな大人の女の人が、あんなふうになるなんて」

「あのひと、全然大人なんかじゃないから」

清人はおたまで鍵をすくい出しました。

「俺は食えるけど、菜々ちゃんはもうこの鍋食えない？」

菜々は首を振って、清人は緩く微笑みました。二人はようやく鍋をぼそぼそと食べ始めました。

「どうして房子さんと別れちゃったんですか？」

菜々は初めてライブでみる痴話喧嘩の内容から、全貌がつかめなかったので聞いてみました。

「そうねえ。あのひととき、俺とこんなに長くつきあうつもりなかったのよ。あのひとあんな仕事してるし、周りの友達みんなそれなりに高収入高学歴のまっとうなサラリーマンと続々と結婚してって、俺とはそういう“王子様”が現れるまでのつなぎくらいに思ってたのよ。俺、こんなだし、別にそれは構わないと思ってたんだ。一緒にいて楽しかったし。俺もしばらく楽しめればいいや、って。でもだんだん周りの友達に独身がいなくなってきた、焦りだしたんだね。友達が結婚するなんて聞くと、相手の素性聞いては暗くなってきた、俺はいつ別れようって言われるのかなあって思ってたんだけど、あのひと、ひとりになれなくなってるみたいでさ。俺と一緒にいても楽しくなさそうなのに、やたらに一緒にいたがるんだよ。俺もそんな女と一緒にいても楽しくないし、彼女の人生どうこうできないし、彼女も俺にそんな期待、端からしてないし、それで彼女がすっかり他に目を向けるためにも、俺から別れようって言わないと、どうにもならないな、と思って、んで、そう言ったわけ」

菜々はなるほど、と深く納得しました。

「自分から房子さんのことを思って身をひいたってことは、清人さんは房子さんのこと、やっぱり本当は好きってことですね？」

「きみはなんでもホイホイ聞くねえ」

と清人は苦笑しましたが、

「そうだな。やっぱり、前みたいに好きってことはないね。興味がなくなった」

と、少し寂しそうに言いました。

だったら、と菜々は清人にぐつと身体を寄せました。今度は清人がぎよつとしました。

「あの、私って、やっぱり魅力ないですか？」

「え？ そんなことないよ、どうしたのよ？」

清人は暴れる房子よりはるかに怖いと思いました。

「あの、私、処女なんですけど、よかつたらしてもらえないでしょうか？」

「ちょ、ちょっと待ってよ、それはマズいでしょ、いろんな意味で俺、このままやっちゃったら、犯罪者になるんじゃないの？」

「私、そんなに無責任じゃありません！」

菜々がどんと頭を清人の胸に押し当てました。(続く)

四 果たして飛べるのか、この蝶々

菜々は清人の男らしい胸板の体温を感じて、急に怖くなりました。でも今更引き下がるわけにもいきません。頭をさらに押しつけました。慌てて清人が菜々を押し返そうとすると、ドアを激しく叩く音がしました。清人は救われたように立ち上がると玄関を開けました。そこには俯き加減に涙をポロポロこぼす房子が立っていました。

「お願い、今日は泊めて。当たり前だけど、セックスなんてしないでいいから、一緒にここで寝かせて」

房子は嗚咽交じりの声を廊下に響かせながら、菜々なんてまるで眼中にない様子で泣きじゃくりました。わかったわかった、と清人は房子を部屋に入れました。

「もう遅いし、菜々ちゃん送ってくるから」

ファンデーションに涙のスジをいくつも作り、マスカラも滲む顔で房子は頷きました。菜々も仕方なく帰ることにしました。部屋を出るとき、菜々は房子に向かって軽く頭を下げました。

アパートから出て二人で歩くと、菜々は男の人と、しかも好きな人と二人きりで肩を並べて夜道を歩くのは初めてだなあ、と思いました。いろんな初めてが今日あったけれど、これが一番素敵な「初めて」のような気がしました。

「清人さん、もてもてですなえ」

「なんて一日だ。頭がおかしくなりそう。俺には女難の相が出てるに違いない」

「私もやっぱり女難ですか？」

「未成年の逆レイプに乗ったらずいだろう。幸いにもそのくらの良識が発揮できる程度には枯れてますよ、俺は」

「結局、房子さんって、清人さんのこと好きだってことですよなえ。私にはもう友達だって言ってたのにな。私が子供だから、本当のこ

と言ってもらえなかったのかな」

「そういうことじゃないと思うよ。気にしないほうがいいよ。要は情緒不安定なだけだから」

清人は駅前まで菜々を送っていきました。

翌日フィガロに行くと、勝手口で清人がまたタバコを吸っていました。清人はやはり何事もなかったかのように、おう、と言いました。今度は菜々もいつものように、ちわ、と答えて、店に入りました。

菜々は房子が店に入ってくるのを待っていました。その日は現れませんでした。もしかしたらもうずっと来ないのかもしれないと思うと寂しくなりました。菜々は、もし房子が現れたら、大人らしく、何事もなかったかのように接するのにな、と思いました。房子が現れないのは、自分っていう子供がいるせいだからのような気がします。

菜々は昨夜のことを振り返って、「処女による逆レイプ」はやっぱりまずかったなと思いました。今考えると、到底ありえないことをしでかしたものです。房子の毒氣に当てられたせいだって気もしましたが、責任転嫁はいけません。でもいろんな「初めて」がありすぎて、つい自分を見失ってしまいました。もしあのまま清人がその気になっていたらと思うと、怖くて身震いがしました。ただセックスはまずいけど、あのまま強引にキスはしておくべきだったな、とは思いました。高校三年になる前にファーストキスを完了させる、千載一遇のチャンスだったのに。

それにしても、あのあと房子と清人はどうなったのでしょうか。もし二人がヨリを戻したのなら、自分は清人を好きでいるべきではないと思いました。でももし、本当に二人がヨリを戻したって知ったら、シヨックで寝込んでしまうかもしれません。でも、どつちなんだろう、って悶々と過ごしても同じことです。やはり、どんなにシヨックな答えが待ってようと、気にかかることははっきりさせなくては、次のステップに進めません。ふと見ると清人は洗い場に

立って洗剤をあわ立てていました。

狙いを定めたお客が帰ると、菜々は下げた食器をトレイに乗せて、清人のところに足を運びました。清人が気づいてふと顔を上げると、菜々は言いました。

「昨日、あれから房子さんと、どうしたんですか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8633m/>

恋とはこんなものでしょう

2010年10月8日13時44分発行